

「苦しみに遭うときに思い出して欲しいこと」  
ローマの信徒への手紙 1:18-23（新共同訳）

## I 導入部

- みなさん、おはようございます。お祈りをします。
- 本日の説教題は「苦しみに遭うときに思い出して欲しいこと」というものです。
- 「思い出して欲しいこと」と名のつく説教は、今回で3回目ですので、ワンパターンだ！と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、聖書という書物においては、苦しみの問題というのは中心的なテーマなのです。
- どうして、聖書は苦しみの問題を中心に扱っているのか。それは、人生には苦しみがあるからです。苦しみがある。今も苦しみのなかにあるという方もいらっしゃるでしょう。もちろん、今は、特に苦しんでいません、という方もいらっしゃるでしょう。でも、これからの人生において、苦しみを経験しないなどという保証はどこにもない。
- だからこそ、聖書は、苦しみについて語っていて、そして苦しみに遭うときに思い出すべきことが語られているわけです。
- 先ほど開かれた箇所において、パウロは、この世界にある苦しみを見つめています。そのキーワードは「うめき」という言葉です。「うめき」。
- この箇所においては、パウロは3つの存在のうめき声を描いていますが、3つの存在の苦しみのうめきを順番に見ていくことを通して、苦しみに遭うときに思い出したいことをご一緒に確認し、イエスを共に礼拝していきたいと思えます。

## II 本論部

### 一. 被造物のうめき

- この箇所において、最初に描かれている「うめき」は、「被造物」のうめきです。
- 19節からですが、「被造物」、それは「神さまに造られたもの」という意味ですから、普通は、人間を含むこの宇宙のすべてを指します。
- しかし、この箇所においては、23節に、「被造物だけでなく、わたしたちも」と比較されていますので、ここでは人間以外のすべての世界を指すと思われます。
- そして、20節によると、その被造物が「虚無に服した」、21節によると「滅びへの隷属」に陥っているとされています。
- これはどういうことかと言うと、みなさんは、自然は好きですか。自然の中にいるのは好きでしょうか。私は、散歩が大好きです。まあ最近では寒いので、あまり散歩していませんが、公園とかを歩いたりするのが大好きなんです。
- 自然というのは本当に美しいと思います。しかし、このローマの信徒への手紙を書いたパウロは、自然の美しさを見ると共に（1章にはそういうことも書いています）、その美しさの背後にある、自然の悲惨さ、虚しさ、滅びを見た。悲惨さ、虚しさ、滅び。
- 確かに自然界は残酷ですよ。無秩序な面もある。そして、ある時には人間に牙を向いてくる。
- 明日はあの東日本大震災から、8年目の日です。あの日、みなさんはどこで何をされていたでしょうか。
- 私は、KGKの学生のキャンプのために長野県にいました。あの日の前が、ずいぶん昔に思える。あの日から、人生が全く変わってしまったように思える。私ですらそのように思うのですから、被災された方々にとっては尚更のことでしょう。
- 明日、私たちはそのような痛みを覚えておられる方々に心を合わせたいと思えますが、この日本にあっては、いつなるときあのような災害が起こっても不思議ではない。いつなるとき、苦しみが襲ってくるか。それは誰にも分からない。
- あなたは、被造物のうめきが聞こえるでしょうか。

- 創世記の3章によると、アダムが罪を犯したことで、地が呪われた、全宇宙に影響が及ぼされ、全宇宙が呪われてしまったということが語られています。その日から、被造物はうめいている。苦しみのうめき声をあげている。
- パウロには、被造物のうめきが聞こえた。そして、被造物のうめき声は、パウロの時代よりも、現在の方が大きくなっている。環境破壊は異常なスピードで進んでいます。汚染された森が、水が、動物たちが、そして大地がうめいている。一つ目のうめき、それは被造物のうめきであります。

## 二. 教会のうめき

- 23節からは、2つ目のうめく存在が描かれています。それは、クリスチャンたちの、教会のうめきです。
- 23節をご覧ください。「被造物だけでなく、「霊」の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。」
- 体の贖われることを、待ち望んで、うめいている。
- 私たちの体って、本当に弱いですよ。病気になることがあります。私自身は幸いなことに、今は、病は持っていませんが、心傷ついたり、疲れてしまったり、また罪に向かってしまう、失敗をしてしまうことことがある。
- 実は、私はちょうど1年前の3月からこの教会でユースパスターとしての働きを始めました。先週日曜日が、青葉台教会一周年でした。
- 「まだ一年か...」と思うくらい、大変濃いというか、いろんなことがあった一年でした。この一年、みなさまの祈りと、また具体的なサポートに支えられて、もちろん時にはイジられながら、かわいがっていただきながら、ユースパスターとしての働きが守られたことを心から感謝しています。
- もちろん楽しいことの方が多かった。でも、もちろん苦しいこともあった。失敗したなあと思うこともありましたし、またユースパスターとともに、KGK キリスト者学生会の働きもしていますので、忙しくて、あるいは不全感、自分の至らなさを覚えて、疲れ果ててしまいそうになるときもありました。文字通り、うめくことだってあったわけです。
- もちろん、ご高齢の方を始め、病をもっておられる方や、あるいは体は健康でも、人間関係のなかで傷つくことがあったり、経済的・物質的な心配があったり、愛する人との別れを経験したり、様々な苦しみがあった。この2018年度を振り返るときに、大きなうめきを経験された方もいらっしゃるでしょう。
- 私もこの1年、もちろん、全てではありませんが、みなさんの様々な痛み、苦しみ、うめきを、少しでも知ることができたことを心から感謝しています。
- 教会もまたうめく。わたしたちも、うめくことがあると思うんですね。

## 三. 将来の栄光

- うめきが、確かに、今この世界にはある。被造物が、そして教会がうめいている。この世界には、苦しみがある。
- しかし、思い出していただきたい。18節にはこのようにありました。
- 18節、「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないわたしは思います。」
- パウロは、被造物と教会のうめきを聞き取りながら、でもそのような「現在の苦しみ」は、「将来わたしたちに現されるはずの栄光」と比べるならば、取るに足りないと語る。
- 「栄光」とはなんでしょうか。
- これは、以前もお話ししましたが、「すごい！」と思われたり、言われたりすることです。栄光ゼミナールという学習塾がありますが、これは受験に合格してすごいって言われようぜ！という意味なのですが、聖書においては、神の栄光という意味で用いられることが多い。
- 神さまが、すごい！素晴らしい！ということが、はっきりと分かる日が来る。そのことを思えば、そのことと比べれば、現在の苦しみは取るに足りない。

- それは、19 節によると、「神の子たちの現れる」ときです。21 節によれば、「神の子供たち」に、そして被造物にも、「栄光に輝く自由」が与えられる。
- 23 節によれば、キリスト者たちが「神の子とされる」。これは「すなわち、わたしたちのからだの贖われること」とありますから、私たちが名実とともに「神の子」とされ、弱い罪のからだでなくなる。新しい、復活のからだを与えられる。
- これが「将来わたしたちに現されるはずの栄光」である。イエスさまがもう一度この世界に来られるとき、被造物が、そして教会が完全に救われる。すべての苦しみがなくなるときが来るのだ。
- 少し戻っていただいて、22 節には「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている」とあります。
- お母さんが子供を産むとき、めっちゃ苦しいらしいです。私はおそらく経験することはないですが。言いたいことは、今の苦しみがやがての喜びのための痛みであるということです。
- 24、25 節をお読みします。
- 「わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。／わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」
- 「将来わたしたちに現されるはずの栄光」。それは目に見えない。だからこそ、「望む」。このことばは「信頼する」という意味でもあります。忍耐して、信頼して、待ち望む。
- しかし、愛するみなさん。ここまで聞いて、どうですか。なんかあまりピンとこないと思うでしょうか。あるいは、この世界で直面する苦しみを前に、「やがて来る『栄光』など待つことができない。待ちきれない！ 耐えきれない！」と思うことがあるかもしれません。

#### 四. 聖霊さまのうめき

- 最初に私は、この箇所には3つのうめきがかかれていたと言いました。
- 1つ目のうめきは被造物のうめきでした。2つ目はクリスチャンたちの、教会のうめきだと言いました。「将来わたしたちに現されるはずの栄光」を待ち望みながら、苦しんでいる、うめいていると言いました。
- しかし、これでもまだ終わらないのです。私たちが最後に目を向けるべきは、3つ目のうめく存在、それは聖霊さまであります。
- 26 節をご覧ください。「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。」
- 「現在の痛み」、そのなかで、うめくなかで、どう祈ったら良いか分からない。そのような経験をするのではないのでしょうか。
- 私たちは、私たち抱える痛みを、あるいはこの世界にあるさまざまな痛みを、もし中途半端に見つめているだけなら、簡単に祈れるでしょう。
- しかし、本気でこの痛みを、自分の、あるいはこの教会のなかにある、あるいはこの世界にある「痛み」を本気で見つめるならば、ことばを失わざるを得ないのではないのでしょうか。
- みなさんは、祈りがうめきにしかならないという経験をしたことがあるのでしょうか。もう言葉が出てこないんですね。「う〜」とか「ああ〜」としか言えない。そのような経験をしたことがあるのでしょうか。
- そのようになるまでに、「痛み」を見つめたことがあるのでしょうか。そのようになるほどの「痛み」を経験したことはあるのでしょうか。
- 私たちの信じている神は、私たちの弱さを知っておられるがゆえに、私たちをあきらめない。だから、聖霊さまを遣わし、聖霊さまは私たちとともにうめき、執り成してくださる。
- 聖霊さまはきよめ主と言われます。私たちのゆがみを、罪の性質をときにじっくり、ときにはが一つと、直してくださるでしょう。

- また、聖霊さまは慰め主と言われます。私たちの傷や痛み、満たされない心を癒してくださる。
- また、I コリント 12:3 には「**聖霊によらなければだれも『イエスは主である』とは言えない**」とあり、聖霊が信仰の告白を助けてくださるということが分かりますし、ヨハネ 14:26 によると聖霊は、みことばを、十字架の赦しを指し示してくださる方だと言われます。このすべての働きをひっくるめて、「聖霊の執り成し」であると思うのです。

### 五. 益となるという告白

- だから、わたしたちはこのように告白できるのです。28 節、「**神を愛する者たち、すなわちご計画にしたがって召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。**」
- 実は、「知っています！」という言葉が、原語ですと先に来るのですが、これはパウロがよく用いる確信をこめた、重い告白なんですね。
- 「将来の栄光」のとき、イエスさまが再び来られる再臨のとき、すべての苦しみがなくなるのだ。そして、すべての苦しみの意味が分かる。
- それまでは、すべての苦しみにも意味があるということは分かっている。でも、それまでは、どんな意味なのかということとは分からないことの方が多い。いやむしろ、簡単に苦しみを意味を断定すべきではない。
- でも、「将来の栄光」のとき、イエスさまが再び来られる再臨のとき、すべてのことが「益」であった。「益」となったと言えるんだ。そのことを私たちは知っているのだと、普通はそんなことを言えません。でも、聖霊さまが助けてくださるから、その告白に立てなくなりそうなときにも聖霊さまが執り成してくださるから、今日もまたこの告白に帰ってくるができる。

### Ⅲ 結論部

- あなたは今日ここから、一人で遣わされるのではない。聖霊さまがあなたと一緒に、この一週間を歩んでくださる。
- 今日は、受難節最初の日曜日です。先週水曜日が、「灰の水曜日」と言われますが、この日から、4月 21 日のイースターまでが、受難節と言い、イエス様の苦しみを覚える季節です。あなたを愛し、あなたに永遠のいのちを与えるために、苦しまれたイエス様を覚えながら、この礼拝から遣わされていきたい。
- あなたも、今苦しみのなかにあるかもしれない。これからも、この地で生きる限り、痛みはある。うめくことがある。でも、思い出して欲しい。苦しみに遭うときに思い出して欲しい。忘れそうになることがあっても、あきらめずに思い出して欲しい。あきらめないでいただきたい。なぜなら、神さまは、あなたをあきらめておられないから。
- あなたと共にいて、将来の栄光に至るまで、導き、守ってくださる。そのことを思い出して、今日ここから、遣わされていこうではありませんか。お祈りしましょう。